

度の平均値を、それぞれシュート生産力と技術力とした。それらの相関係数が0.17であったことから独立事象として扱い、シュートを生み出す選手か、技術の高い選手かを評価する攻撃特性尺度を作成した。1試合のシュート数を妥当基準としてポジション別に相関係数を算出した結果、FWは0.78、MFは0.60、DFは0.37であり、尺度の妥当性を確認した。

GB11[センターB]

8月27日

14:06

測27-004

10年前と現在における大学男子柔道選手の減量実態に違いはあるか？ 2004年と2013年の比較から

○久保田 浩史（岐阜大学）
宮口 和義（石川県立大学）

出村 慎一（金沢大学）
内田 雄（金沢大学大学院）

柔道は階級制競技であるため、試合に向けて減量を行う選手が多い。本研究の目的は、10年前と現在における大学男子柔道選手の減量の実態を比較することであった。全国大会ベスト8入賞実績をもつ大学柔道部に所属する272名（2004年）、303名（2013年）を対象に、減量実施率、減量方法、体重超過量、減量中に感じることを調査した。減量実施者は2004年：149名（54.4%）、2013年：121名（39.9%）で、2004年の減量実施者は2013年に比べ有意に多かった。減量開始前の体重超過量（規定体重に対する比率）は、2004年：6.1%、2013年：6.2%で、差は認められなかった。減量方法として、水分摂取の制限（2004年：59.9%、2013年：48.5%）やサウナの利用（2004年：45.6%、2013年：33.9%）がみられた。減量中の愁訴として、10年前及び現在において、40%以上が「のどが渇く」、「疲れやすい」と回答した。結論として、減量実施者は10年間で減少し、減量方法も改善されているが、依然として減量に脱水法が用いられ、疲労感の増大を誘発している可能性があることが示唆された。

GB11[センターB]

8月27日

14:18

測27-005

運動観察法による小学生の走動作の局所独立性の検討

○國土 将平（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

運動観察法による運動動作の構成の際に、動作因果関係を考慮してモデルを構築してきた。これらの動作の困難度評価に際して、項目反応理論を適用するが、局所独立性の仮定は重要な仮定の一つである。動作因果関係を考える場合、局所独立性が確保されない可能性がある。本研究では小学生の走動作について、局所独立性について検討することを目的とした。対象は小学校3年生92名（男子43名、女子49名）の50走の25～35m区間の走動作を側方および前方より毎秒60コマで撮影した。その映像をスローモーションならびにコマ送りで再生し、國土（2013）の38の動作観点について評価した。その資料に対して、項目反応理論を適用し、動作の θ に基づき、20%値毎の5階級に分けた。局所独立性を検討するために、それぞれの階級で、因果関係のある動作42の組み合わせについて、クロス集計ならびにフィッシャーの正確確率検定を適用した。その結果210検定中、11検定で5%水準で有意な連関を示した。そのうち4個はスイング局面の足部最高到達点と膝の折りたたみであった。その他の項目は局所独立であると推察される。（本研究は日本学術振興会科学研究補助金基盤研究（C）24500697により実施された。）

測

GB11[センターB]

8月27日

14:30

測27-006

児童期後期における身体活動および学習動機づけの構造的関連

○池田 孝博（福岡県立大学）

青柳 領（福岡大学）

近年、体力と学力の関連が報告され、体力・学力ともその背景としての意欲の関与が指摘される。本研究の目的は児童期後期の子どもの身体活動と学習に関する2つの動機づけの構造的関連について検討することである。日本と韓国の小